

8) 緑膿菌による慢性気道感染症に対する化学療法 法の検討

高木 秋夫・原口通比古 (新潟市民病院)
成田 昌紀・俵谷 幸蔵 (呼吸器内科)

昭和61年から63年までの3年間に当院に入院した気管支拡張症の症例84例を検討した。喀痰中から緑膿菌が証明された症例は6例あった。間質性肺炎に緑膿菌感染を合併した症例1例を加え、全部で7例の患者の喀痰から培養された緑膿菌の各種抗生剤に対する感受性検査の結果をまとめた。良好な感受性を示した抗生剤はPI-PC, SBT/CPZ, CFS, CZON, AZT, IPM/CS, GM, OF-LX, CFPX であり、一般的な傾向とはほぼ同様の結果であった。緑膿菌感染を伴う気管支拡張症6例中3例を選んでその治療経過を呈示した。高い感受性を持つ抗生剤を2ないし3種類併用して治療したにもかかわらず、3例中緑膿菌が消失したのは1例のみで、1日喀痰量は3例とも治療前後で殆ど変わらなかった。広範で高度の気道病変を伴った緑膿菌感染症に対しては化学療法により著効を期待するのは難しく、せめて増悪させないことを目的に抗生剤を使用しているのが現状であると思われた。

9) 新しいニューキノロン系抗菌剤 AT-4140 の各種肺炎に対する効果

武田 元 (長岡赤十字病院)
内科

AT-4140 は大日本製薬総合研究所で開発された新しい経口用ピリドンカルボン酸系抗菌剤である。

その抗菌スペクトルはグラム陽性菌、陰性菌、結核菌、非定型抗酸菌、マイコプラズマ、クラミジアと巾広く、抗菌力は非常に優れている。また、血中半減期は16時間と長く、1日1回の投与で十分な血中濃度の維持が可能である。

細菌性肺炎と考えられる3例、マイコプラズマ肺炎4例、おむね病1例に本剤による治療を試み、いずれも有効であった。また、副作用は全くみられなかった。

本剤は真菌、Pneumocystis carinii, ウイルスなどを除くすべての呼吸器感染症の原因微生物に抗菌スペクトルを有し、Community-acquired pneumonia に対して極めて有用な薬剤であると思われる。

10) 薬剤性多臓器障害の2症例

関根 理・薄田 芳丸
青木 信樹・甲田 豊
田中 一・牛山えり子 (信楽園病院内科)

RFP, INH, SM による抗結核治療開始3日目に昏睡に陥るとともに肝、腎機能障害を来し、間質性肺炎像を呈した男性は、全身状態改善後化学療法を再開したところ、再び発熱とともに多臓器障害を発症した。2回目は意識障害は伴わなかった。白血球遊走阻止試験によりRFP過敏症と判明した。本例は下垂体、副腎、甲状腺系の機能低下を有していたがこれと多臓器障害、意識障害との関連は明らかではない。

第2例はIgA腎症の女性、CCLを反復服用後、3度目の服用で皮疹、胆汁うっ滞型肝機能障害、貧血、間質性肺炎を伴う間質性腎炎を発症し、ステロイドにより急速に改善した。白血球遊走阻止試験でCCL陽性であった。

RFP, CCLによる多臓器障害は殆ど報告がないが今後留意を要するところと考えられる。

特別講演

上気道細菌感染の成立機序と化学療法

名古屋市立大学耳鼻咽喉科教授

馬場 駿 吉 先生